

## 「やりたいこと探し」の動機とキャリア選択における 意思決定の困難さとの関連

筑波大学大学院（博）人間総合科学研究科 萩原 俊彦

筑波大学大学院人間総合科学研究科・心理学系 櫻井 茂男

The link between the motivation to “search for something to commit to” and difficulties in making career decisions among undergraduate students

Toshihiko Hagiwara and Shigeo Sakurai (*Institute of Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The purpose of this study is to examine the link between self-determined levels of motivation to “search for something to commit to” for career choices and difficulties in making career decisions. A questionnaire was administered to 241 undergraduate students, consisting of scales relating to the motivation to “search for something to commit to” and the revised Career Decision-making Difficulty Questionnaire. The results indicate that undecided students who feel uncomfortable about the progress in making career decisions tend to experience higher levels of difficulty in making career decisions. Among them, students who report lower levels of self-determined motivation to “search for something to commit to” tend to have difficulty in identifying their preferences for career choices and to lose confidence in their choices. This study argues that a sense of self-determination to “search for something to commit to” is linked with difficulties in making career decisions.

**Key Words:** search for something to commit to, career decision-making difficulty, self-determination theory, undergraduate students

### 問題と目的

大学生のキャリア選択は成長の好機であると同時に、不首尾な選択による挫折の経験や、それに後続する社会的排除といった危機をも内包するライフ・イベントである。近年、将来の職業に関する展望が持たず、職業を決定しない・できないという職業未決定の問題が多く取り上げられていること（後藤，2008；白井，2008；田澤，2005）を鑑みれば、現在の大学生はキャリア選択やその後の適応に問題を抱えていると考えられる。

こうした未決定の問題に心理学的にアプローチする立場から近年注目されてきたのが、「やりたいこ

と志向」（安達，2004；日本労働研究機構，2000）である。当初はフリーターに特有のものとされたこの志向は、現代の若者一般にも広く支持される価値志向であることが指摘されるようになった。同時に、「やりたいこと」へのこだわりが、自己分析から実際の就職活動への移行困難（大久保，2002）や、職業の社会的意義・公共性の軽視（下村，2003）といった不適応的状况をもたらすという報告がなされるようになっていく。

このような、自己の価値・興味に基づいてキャリア選択に関わる自己および環境の探索を行おうとする「やりたいこと探し」については、キャリア未決定との関連で、これまで賛否両論の見解（e.g. 安達，

2004; 本多, 2004; 三宅, 2005; 若松・下村・山田・佐藤・上瀬, 2005) が散見されてきた(田澤, 2006)。しかし近年では, この関連について体系的な説明が試みられてきている。

例えば, 安達(2008)は, キャリア意識の一つとしての「やりたいこと志向」が, 就業動機のうち, 自己の価値基準を重視する動機である自己向上志向を促進するものの, 仕事を通じた人とのかわりを重視する対人志向や, 社会的地位・名声を求める上位志向とは無関連であることを明らかにした。また, 具体的なキャリア探索行動とも無関連であることを示し, 「やりたいこと志向」が就業動機・具体的行動の側面で, どのようにキャリア未決定と関連するか説明を行っている。また, 若松(2008)は, 進路意思決定方略の検討から, 自己分析を先行させる方略をとっていると, 選択肢に納得がいかない感じを払拭できなかつたり, 決定に不本意なままであったり, 悩まされる困難さをなかなか解決・解消できなかつたりといったネガティブな影響があることを明らかにしている。このように, 「やりたいこと探し」がキャリア未決定のどのような側面において問題なのか, 詳細な検討が試みられるようになっている。

その中で, 萩原・櫻井(2008)は, 大学生のキャリア選択における「やりたいこと探し」の動機を, 自己決定理論(Ryan & Deci, 2000)の観点から明らかにし, 併せて, 「やりたいこと探し」の動機の個人差と進路不決断との関連を検討した。その結果, 「やりたいこと探し」の動機のうち, 非自己決定的な動機が優勢であると, 職業決定に関する不安, 職業選択に際しての葛藤, 職業決定での外的な統制感, ならびにモラトリアム的な感覚が強いことが示された。これにより, 「やりたいこと探し」をする際の動機の自己決定性レベルは個人によって異なること, また, その個人差がキャリア未決定に対して影響を及ぼす可能性を持つことが示唆された。

しかし, 萩原・櫻井(2008)には次の2点で問題がある。第一の問題は, 調査対象者のキャリア決定状況に関して, 決定・未決定を込みにして「やりたいこと探し」とキャリア未決定との関連を検討している点である。より詳細な検討を行なうためには, 対象者をキャリア未決定者に限定して, 決定者との対比を行なう必要がある。第二の問題は, キャリア選択における「快適さ」の観点が入っていない点である。「快適さ」とは, 自分のキャリアが決定・未決定の状況にあることに対する主観的な悩みの高低を指すものである(Gordon, 1998; 若松, 2001)。未決定者のうち, 快適さの高い人を除外することに

よって, 未決定について悩んでいるという点でより均質な人たちを分析対象とすることが可能になるであろう(若松, 2001)。

以上から, 本研究では「やりたいこと探し」の動機とキャリア未決定との関連について, 対象者のキャリア決定状況と「快適さ」を加味した検討を行なうことを目的とする。キャリア未決定との関連については, 進路意思決定上の困難を包括的に捉えることができる Career Decision-making Difficulty Questionnaire (CDDQ; Gati, Krausz, & Osipow, 1996)の改定版である CDDQ-R(若松, 2001; 2004)を用いて検討を行なう。Gati et al. (1996)の CDDQ は, 未決定者の抱える困難さを体系的に整理して項目化したものである。網羅性も高く, 抽象度が低い項目で, 未決定のメカニズムにも迫りうるものであることから(若松, 2001), 本研究での検討にふさわしいと考え, 採用した。

本研究の仮説は次の通りである。自己決定理論では, より自己決定的に遂行された行動は適応的な結果と関連があることが示されている(Ryan & Deci, 2000)。職業探索の動機についても同様の関連が示されていることから(e.g. Vansteenkiste, Lens, De Witte, De Witte & Deci, 2004), 「やりたいこと探し」の動機において, 非自己決定的な動機が相対的に高い人ほど, 進路意思決定における困難さの程度は高くなると予測される。また, 「やりたいこと探し」は, 自己の価値・興味に基づいたキャリア選択に関わる自己および環境の探索であることから, 「やりたいこと探し」の動機の個人差は, CDDQ-Rの中でも進路の選択肢や自分の興味・価値志向に関連する悩みと主な関連を持つと予測される。

## 方 法

### 調査対象

関東圏内にある国立大学法人の大学生241名(男性122名, 女性118名, 不明1名)であった。学年の内訳は, 1年生7名(男性4名, 女性3名), 2年生199名(男性97名, 女性102名), 3年生29名(男性19名, 女性10名), 4年生5名(男性2名, 女性3名), 不明1名であった。平均年齢は19.81歳( $SD = 0.92$ )であった。なお, まだ進路の確定していない大学生のキャリア意識を調査する目的から, 調査時点で既に卒業後の進路が確定している可能性が高い4年生5名と, 学年・性別不明の1名を分析から除外した。これにより, 分析対象者は235名となった。

### 調査時期および調査手続き

2006年9月に無記名の個別記入形式の質問紙で、大学の講義時間中に集団式にて実施した。回答所要時間は約15～20分であった。

### 調査内容

「やりたいこと探し」の様態を問う項目：将来仕事につく上での「やりたいこと」に限定して、「やりたいこと」を過去探していたのか、今探しているのか、過去も今も探していないのかについて回答を求めた。

**進路決定・未決定の定義**：若松（2001；2002）の指標を用いて、(1) 考慮している選択肢を全て挙げさせ、更に(2)「『この進路なら目指すと決めてもう迷わないし、これ以上具体的に詰めるつもりがない』という選択肢はどれですか（他にまだ迷っている選択肢があっても構いません）」の設問で、1つ以上の選択肢を挙げた人を決定者と見なした。

**「やりたいこと探し」の動機尺度**：萩原・櫻井（2008）が自己決定理論（Deci & Ryan, 1985；Ryan & Deci, 2000）に基づいて作成した、キャリア選択における「やりたいこと探し」の動機を測定する尺度である。やりたいことがあること、やりたいことを考えること自体が自己の充足感を高めるといふ、自己決定的な動機である「自己充足志向」12項目、将来における自分の社会的立場を確保し安定させるといふ、自己決定の面では中間的な動機である「社会的安定希求」9項目、自分は周りの人に比べて出遅れており、それに追いつかねばならないといふ非自己決定的な動機である「他者追従」4項目の、3つの下位尺度から構成される。本尺度は萩原・櫻井（2008）にて信頼性と妥当性が確認されている。回答形式は「1 あてはまらない」から「5 あてはまる」までの5件法である。

**CDDQ-R (Career Decision-making Difficulty Questionnaire)**: Gati et al. (1996) が作成した同尺度を、若松（2001；2004）が改定したものである。進路意思決定時に有する困難さを「能力に関する戸惑い」（例「私の能力は、その進路が必要とするくらいまで伸びるだろうか」）、「適合へのこだわり」（例「自分が進路に持っている好みは将来変わるのではないだろうか」）、「興味や好みの模索」（例「私はどういう方向の進路に興味がある（意欲を感じる）のだろうか」）、「選択方法に関する迷い」（例「良い進路選択をするにはどんな手順を踏まなくてはならないのだろうか」）、「進路先の実情への不安」（例「ふつう、その進路に進んだ後はどういうコースをたどることになるのだろうか」）、「現実的な障害」（例「私

が決意した進路のことを、私の大切な人たちにどうやって説得したらよいのだろうか」）、「実現可能性への不安」（例「私とその進路に進める可能性はどのくらいありそうだろうか」）の7種類から測定する尺度である。本尺度は40項目から構成され、回答形式は「1 全然悩まされていない」から「6 すごく悩まされている」までの6件法である。本研究では、それぞれの困難さの合計得点を項目数で除した値を下位尺度得点として用いた。得点が高いほど、その下位尺度が示す意思決定に関して困難さを感じていることを表している。

**「快適さ」の指標**：未決定の質を測定するための指標であり、Career Decision Profile (Jones, 1989) の同名の指標を、若松（2001；2005）が翻訳したものである。「納得感」の項目（「私は自分が今まで進路について考えてきたことや決めてきたことに納得しており、すっきりした気持ちでいられる」）、ならびに「非心配感」の項目（「私は自分の進路選択について心配していない」）の2項目から構成される。回答形式は、「1 全くそう思わない」から「8 全くそう思う」までの8件法である。

## 結 果

### (1) 「やりたいこと探し」と決定・未決定の様態

Table 1 に、本研究の調査対象者における進路決定・未決定の別と「やりたいこと探し」の様態に関するクロス集計表を示す。進路の決定・未決定別に「やりたいこと探し」の様態を比較したところ、有意な人数比率の偏りが見られた ( $\chi^2=9.27$ ,  $df=2$ ,  $p<.05$ )。そこで残差分析を行ったところ、進路決定者は未決定者よりも「やりたいこと」を過去に探していた人が多く、現在探している人が少なかった。「やりたいこと」を過去も今も探していない人は、進路の決定・未決定による人数比率の差は見られなかった。以下の分析では、「やりたいこと探し」に関して「過去も今も探していない」と回答した5名を除く230名を分析対象とした。

- 1) 本研究の調査では、やりたいことが「見つかっている」と回答しながら「やりたいことを探している」と回答した対象者が84名存在した。質問の意図からすると矛盾した回答であるが、この回答は「自分のやりたいことが完全に確定した」というよりは、むしろ、「自分が今、将来やりたいと思っていることはあるが、それは確信に至るほどではない暫定的なもので、今後変わるかも知れない」という意味を含んだ回答であると考えられる。本研究では、暫定的でも意思決定できている者は決定者として取り扱い、分析対象に含めた。

Table 1 「やりたいこと探し」と決定・未決定の様態

進路が <sup>a)</sup>	n	「やりたいこと探し」の様態：「やりたいこと」を		
		過去に探していた	探している	過去も今も探していない
決定	111	26 (23.4)	84 (75.7)	1 (0.9)
		<u>2.9**</u>	<u>-2.3*</u>	<u>-1.2</u>
未決定	124	12 (9.7)	108 (87.1)	4 (3.2)
		<u>-2.9**</u>	<u>2.3*</u>	<u>1.2</u>
合計	235	38 (16.2)	192 (81.7)	5 (2.1)

a) 括弧内は行和の%

b) 下線を付した数値は調整された残差である.

c)  $\chi^2 = 9.27, df = 2, p < .05.$

\*  $p < .05, ** p < .01.$

## (2) 「やりたいこと探し」の動機パターンによる調査対象者の分類

「やりたいこと探し」の動機尺度の3つの下位尺度である「自己充足志向」「社会的安定希求」「他者追隨」をZ得点に換算し、それを用いてクラスタ分析(k-means法)を行った。各クラスタに含まれる調査対象者の数、クラスタの解釈可能性、自己決定理論との整合性などから総合的に判断した結果、3クラスタによる分類が「やりたいこと探し」の動機パターンを最もよく表していると考えられた(Figure 1)。

各クラスタの特徴は、以下の通りである。

第1クラスタ：自己決定的な「自己充足志向」が他の2動機よりも相対的に最も高く、次いで自己決定の面で中間的な「社会的安定希求」、非自己決定的な「他者追隨」という順に低くなる群である。以上から、この群を自己決定的動機群とした。

第2クラスタ：非自己決定的な「他者追隨」が相対的に最も高く、次いで自己決定の面で中間的な「社会的安定希求」、自己決定的な「自己充足志向」という順に低くなる群である。なお、非自己決定的な動機が優位であるが、「自己充足志向」も低くないため、動機が拡散していると考えられる。このことから、この群を拡散的動機群とした。

第3クラスタ：「自己充足志向」「社会的安定希求」が相対的に最も低く、「他者追隨」は前二者ほどではないものの、平均より低い群である。以上から、この群を低動機群とした。

なお、分析対象者230名のうち、自己決定的動機群は95名、拡散的動機群は99名、低動機群は36名であった。

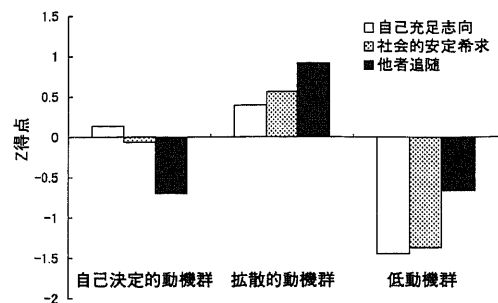


Figure 1 本研究における「やりたいこと探し」の動機尺度のクラスタパターン

## (3) 「やりたいこと探し」の動機パターンによるCDDQ-R得点の差

次に、(2)で得られた3つのクラスタ群を独立変数、CDDQ-Rに含まれる7つの下位尺度「能力に関する戸惑い」「適合へのこだわり」「興味や好みの模索」「選択方法に関する迷い」「進路先の実情への不安」「現実的な障害」「実現可能性への不安」を従属変数として、1要因の分散分析を行った。その結果、全ての分析において有意な群間差が見られたため、TukeyのHSD法による多重比較(5%水準)を行った。多重比較の結果、CDDQ-Rのいずれの下位尺度においても、拡散的動機群が自己決定的動機群、低動機群よりも有意に得点が高かった(Table 2)。

## (4) 決定・未決定および快適さの指標を加味した分析

次に、調査対象者のCDDQ-Rの下位尺度得点における平均値の差を決定群・未決定群で比較するため、t検定を実施した(Table 3)。その結果、「進路先の実情への不安」を除いた6つの下位尺度得点において、未決定群が決定群よりも高かった。

更に、決定群のうち快適さの得点が高い人と未決

Table 2 「やりたいこと探し」の動機のパターンによる CDDQ-R の各下位尺度の差の検討 (全体)

CDDQ-R の下位尺度	クラスターパターン	M	SD	F 値	多重比較
能力に関する戸惑い	自己決定的動機群	3.71	1.07	9.54 ***	自己決定, 低動機 < 拡散
	拡散的動機群	4.23	1.03		
	低動機群	3.45	1.12		
適合へのこだわり	自己決定的動機群	3.14	1.03	10.85 ***	自己決定, 低動機 < 拡散
	拡散的動機群	3.70	0.96		
	低動機群	2.95	1.09		
興味や好みの模索	自己決定的動機群	3.45	1.10	12.92 ***	自己決定, 低動機 < 拡散
	拡散的動機群	4.00	1.06		
	低動機群	3.04	0.98		
選択方法に関する迷い	自己決定的動機群	3.70	1.19	4.91 **	自己決定, 低動機 < 拡散
	拡散的動機群	4.15	1.04		
	低動機群	3.63	1.19		
進路先の実情への不安	自己決定的動機群	3.41	0.95	11.13 ***	自己決定, 低動機 < 拡散
	拡散的動機群	3.90	0.88		
	低動機群	3.22	0.71		
現実的な障害	自己決定的動機群	2.70	1.01	7.87 ***	自己決定, 低動機 < 拡散
	拡散的動機群	3.18	1.01		
	低動機群	2.58	0.81		
実現可能性への不安	自己決定的動機群	3.67	1.11	8.82 ***	自己決定, 低動機 < 拡散
	拡散的動機群	4.23	1.01		
	低動機群	3.55	1.15		

a) 表中の記号 <math>p < .05</math> を表す。

\*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$ .

b) 各クラスターパターンの  $n$  は以下の通り：自己決定的動機群  $n = 95$ , 拡散的動機群  $n = 99$ , 低動機群  $n = 36$ .

Table 3 CDDQ-R 下位尺度の平均値の比較

CDDQ-R の下位尺度	全員を対象			快適さを加味		
	決定群 ( $n = 110$ ) M	未決定群 ( $n = 120$ ) M	t 値 $df = 228$	決定かつ快適さ 高群 ( $n = 81$ ) M	未決定かつ快適さ 低群 ( $n = 86$ ) M	t 値 $df = 165$
能力に関する戸惑い	3.67 (1.16)	4.10 (1.00)	3.02 **	3.47 (1.08)	4.18 (0.88)	4.65 ***
適合へのこだわり	3.08 (1.07)	3.60 (0.97)	3.86 ***	2.89 (1.00)	3.67 (0.93)	5.23 ***
興味や好みの模索	3.27 (1.14)	3.94 (1.00)	4.70 ***	3.06 (0.99)	4.08 (0.92)	6.85 ***
選択方法に関する迷い	3.68 (1.19)	4.07 (1.08)	2.61 **	3.51 (1.13)	4.19 (0.96)	4.21 ***
進路先の実情への不安	3.60 (0.89)	3.58 (0.96)	0.21	3.56 (0.75)	3.64 (0.87)	0.67
現実的な障害	2.71 (1.00)	3.06 (1.00)	2.67 **	2.62 (0.96)	3.07 (0.97)	3.01 **
実現可能性への不安	3.73 (1.18)	4.04 (1.02)	2.12 *	3.61 (1.12)	4.10 (0.90)	3.10 **

a) 括弧内は SD.

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$ .

定群のうち快適さの低い人を比較するため、快適さの項目の「納得感」に着目して、決定群のうち「納得感」の評定が5以上の人（「決定かつ快適さ高群」とした：81名）と未決定群のうち評定が4以下の人（「未決定かつ快適さ低群」とした：86名）を抽出した。なお、「非心配感」の項目は、若松（2001）と同様の床効果が見られたため、快適さの指標としては使用しなかった。抽出された2群間で、CDDQ-Rの下位尺度得点における平均値の差を比較するため、*t*検定を実施した（Table 3）。その結果、「進路先の実情への不安」を除いた6つの下位尺度得点において、未決定かつ快適さ低群が、決定かつ快適さ高群よりも得点が高かった。

そこで、この2群内における「やりたいこと探し」の動機パターンによるCDDQ-R得点の差を検

討するため、(2)で得られた3つのクラスター群を独立変数、CDDQ-Rに含まれる7つの下位尺度を従属変数として、1要因の分散分析を行った。

その結果、決定かつ快適さ高群においては、「進路先の実情への不安」「現実的な障害」において有意な群間差が、「能力に関する戸惑い」「適合へのこだわり」「興味や好みの模索」「選択方法に関する迷い」において有意傾向の群間差が見られたため、TukeyのHSD法による多重比較（5%水準）を行った。多重比較の結果、「進路先の実情への不安」「現実的な障害」ならびに「能力に関する戸惑い」において、拡散的動機群が低動機群よりも有意に得点が高かった（Table 4）。一方、未決定かつ快適さ低群においては、「適合へのこだわり」「興味や好みの模索」「進路先の実情への不安」において有意な群間

Table 4 「やりたいこと探し」の動機のパターンによるCDDQ-Rの各下位尺度の差の検討（決定かつ快適さ高群）

CDDQ-Rの下位尺度	クラスターパターン	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>F</i> 値	多重比較
能力に関する戸惑い	自己決定的動機群	3.40	0.99	3.10 <sup>†</sup>	低動機<拡散
	拡散的動機群	3.82	1.13		
	低動機群	2.97	1.08		
適合へのこだわり	自己決定的動機群	2.83	0.90	2.81 <sup>†</sup>	
	拡散的動機群	3.18	1.06		
	低動機群	2.41	1.05		
興味や好みの模索	自己決定的動機群	3.10	0.93	2.57 <sup>†</sup>	
	拡散的動機群	3.26	1.06		
	低動機群	2.52	0.93		
選択方法に関する迷い	自己決定的動機群	3.39	1.10	2.41 <sup>†</sup>	
	拡散的動機群	3.86	1.07		
	低動機群	3.12	1.26		
進路先の実情への不安	自己決定的動機群	3.58	0.77	3.13 <sup>*</sup>	低動機<拡散
	拡散的動機群	3.73	0.70		
	低動機群	3.12	0.67		
現実的な障害	自己決定的動機群	2.58	0.93	3.71 <sup>*</sup>	低動機<拡散
	拡散的動機群	2.93	1.04		
	低動機群	2.09	0.59		
実現可能性への不安	自己決定的動機群	3.50	1.12	2.30	
	拡散的動機群	3.95	1.19		
	低動機群	3.23	0.82		

<sup>a)</sup> 表中の記号<は  $p < .05$  を表す。

<sup>†</sup>  $p < .10$ , <sup>\*</sup>  $p < .05$ .

<sup>b)</sup> 各クラスターパターンの  $n$  は以下の通り：自己決定的動機群  $n = 40$ 、拡散的動機群  $n = 28$ 、低動機群  $n = 13$ 。

差が見られたため、TukeyのHSD法による多重比較(5%水準)を行った。多重比較の結果、「適合へのこだわり」「進路先の実情への不安」において、拡散的動機群が自己決定的動機群よりも有意に得点が高かった。また「興味や好みの模索」においては、拡散的動機群が自己決定的動機群、低動機群よりも有意に得点が高かった(Table 5)。

考 察

本研究では「やりたいこと探し」の動機とキャリア未決定との関連について、対象者のキャリア決定状況と「快適さ」に着目した検討を行なった。「やりたいこと探し」の動機とキャリア未決定との関連

については、進路意思決定上の困難を包括的に捉えるため、CDDQ-R(若松, 2001)による検討を行なった。その結果、以下の2点が明らかとなった。

第一に、分析対象者全体に対する検討から、「やりたいこと探し」の動機において非自己決定的な動機が優勢な拡散的動機群は、他の2群に比して進路意思決定に関する悩みが大きいことが明らかになった。この結果は、萩原・櫻井(2008)やVansteenkiste et al.(2004)と同様であり、自己決定的に遂行された行動は適応的な結果と関連があるとされる自己決定理論(Ryan & Deci, 2000)が予測する結果に整合するものと考えられる。

一方で、この結果を詳細に検討すると、調査対象者全体において共通するキャリア選択上の悩みが示

Table 5 「やりたいこと探し」の動機のパターンによるCDDQ-Rの各下位尺度の差の検討(未決定かつ快適さ低群)

CDDQ-Rの下位尺度	クラスターパターン	M	SD	F値	多重比較
能力に関する戸惑い	自己決定的動機群	3.98	0.79	2.11	
	拡散的動機群	4.37	0.92		
	低動機群	4.01	0.87		
適合へのこだわり	自己決定的動機群	3.30	0.90	6.74 **	自己決定<拡散
	拡散的動機群	4.01	0.84		
	低動機群	3.38	0.98		
興味や好みの模索	自己決定的動機群	3.80	0.94	6.96 **	自己決定, 低動機<拡散
	拡散的動機群	4.41	0.79		
	低動機群	3.52	0.95		
選択方法に関する迷い	自己決定的動機群	3.93	1.09	2.24	
	拡散的動機群	4.39	0.91		
	低動機群	4.13	0.43		
進路先の実情への不安	自己決定的動機群	3.29	0.80	6.27 **	自己決定<拡散
	拡散的動機群	3.94	0.84		
	低動機群	3.43	0.78		
現実的な障害	自己決定的動機群	2.87	1.02	2.16	
	拡散的動機群	3.28	0.94		
	低動機群	2.80	0.73		
実現可能性への不安	自己決定的動機群	3.86	0.89	1.90	
	拡散的動機群	4.21	0.86		
	低動機群	4.37	1.07		

a) 表中の記号<は  $p < .05$  を表す。

b) 各クラスターパターンの  $n$  は以下の通り：

自己決定的動機群  $n = 32$ , 拡散的動機群  $n = 44$ , 低動機群  $n = 10$ .

\*\*  $p < .01$ .

峻される。本尺度は6件法であることから、下位尺度得点の理論的中間点は3.5点である。Table 2では、「選択方法に関する迷い」「実現可能性への不安」の得点に関しては、3群いずれの得点も理論的中間点を上回っていた。また、「能力に関する戸惑い」の得点については、拡散的動機群と自己決定的動機群が理論的中間点を上回っていた。このことから、キャリア選択に関する具体的手順に関する情報不足、進路の実現可能性を見通す難しさ、能力に関する見積り難しさといった悩みは、確かに拡散的動機群の得点が高いものの、調査対象者全体においても共通するキャリア選択上の悩みであると推測される。

第二に、決定・未決定の別と快適さの高低を加味して検討を行ったことで、未決定に悩む人において「やりたいこと探し」の動機がキャリア未決定に対してどのように関連するかが明らかになった。

Table 3を見ると、未決定かつ快適さ低群においては、CDDQ-Rの「進路先の実情への不安」「現実的な障害」を除いた5つの下位尺度において、その得点は理論的中間点を上回っており、決定かつ快適さ高群よりも有意に得点が高かった。このことは、キャリア未決定の状態に納得していない人は、キャリア選択に関わる意思決定の悩みが一般的に高いことを示唆していると考えられる。

その上でTable 4、Table 5の結果を検討すると、決定かつ快適さ高群では2つの下位尺度で有意差が見られた。しかし、有意差の見られた下位尺度のうち、最も高得点である拡散的動機群の得点が理論的中間点の3.5点を超えたのは「進路先の実情への不安」のみであった。また、有意差の見られなかった下位尺度を含めて見ても、4点を超える点数はいずれの下位尺度においても見られていない。つまり、決定かつ快適さ高群では、一般的に困難さの程度が低く、「やりたいこと探し」の動機の個人差による影響は見られるものの、その得点は「困難がある」とは言いがたい高さである。したがって、決定かつ快適さ高群における結果は、この群に属する調査対象者が自らの決定に対して納得していることを示唆したものであると考えられる。

それに対して、未決定かつ快適さ低群では、有意差の見られた下位尺度のうち、「適合へのこだわり」「興味や好みの模索」において、拡散的動機群の得点はいずれも4点を超え、自己決定的動機群、低動機群とは対照を成していた。これらの下位尺度はいずれも、自分の興味や好みはどこにあるのか、あるとしてもその興味や好みは確かなものか、といった価値志向に関わる意思決定の悩みやこだわりを示す

ものであった。したがって、キャリア未決定に悩んでいても、「やりたいこと探し」の動機の自己決定性が高ければ、価値志向に関わる意思決定の悩みの程度は低く、逆に「やりたいこと探し」の動機の自己決定性が低ければ、価値志向に関わる意思決定の悩みの程度は高いと考えられる。

以上の結果から、「やりたいこと探し」の動機において非自己決定的な動機が相対的に高いほど、進路意思決定における困難さの程度は高くなることが示された。また、実際にキャリア未決定で悩んでいる人においては、「やりたいこと探し」の動機は、進路意思決定上の困難さの中でも、自分の興味や好みが見えなかったり確信が持てないといった、価値志向に関する悩みと関連することが示された。以上より、仮説は検証されたと考えられる。

なお、「やりたいこと探し」の動機パターンにおいて、いずれの動機も低い低動機群では、進路意思決定上の困難が他の群に比して高いという結果は、本研究のどの分析においても示されなかった。自己決定理論(Ryan & Deci, 2000)では、動機の全般的な低さや、そもそも動機がない状態が最も不適応的であるとしている。このことを考えると、本研究における低動機群は自己決定理論に整合しない群とも考えられる。

しかし、「やりたいこと探し」は、キャリア決定に至るための必要不可欠な行動とは言えない点には留意する必要がある。溝上(2004)は、学校や会社にまず所属することで社会のルールに乗り、大人社会に身を委ねることで人生形成を図ろうとする生き方を取る青年もいることを指摘しており、低動機群の中にはこれに該当する者も存在するのではないかと考えられる。一方で、未決定かつ快適さ低群においては有意差こそ見られなかったものの、低動機群はCDDQ-Rの4つの下位尺度で得点が3.5点を超え、そのうち3つの下位尺度で得点が4点を超えていた。このことから、低動機群には「やりたいこと探し」をキャリア決定において必要不可欠な行動ととらえていない人と、萩原・櫻井(2008)で指摘されたような適応的ではない人が混在しているのではないかと考えられる。したがって、「やりたいこと探し」の動機パターンに見られる低動機群については、今後の研究でより詳細な検討を行なっていく必要がある。

また、本研究では進路意思決定上の困難については検討したが、「やりたいこと探し」の動機が大学生の実際のキャリア選択に関わる行動に対してどの程度予測力を持つのかは明らかにされていない。「やりたいこと志向」が社会的動機や具体的行動に



は無関連であることを示した安達（2008）の知見と併せて、今後検討を行なう必要があると考えられる。

## 引用文献

- 安達智子（2004）. 大学生のキャリア選択—その心理的背景と支援—日本労働研究雑誌, 533, 27-37.
- 安達智子（2008）. 女子学生のキャリア意識—就職動機, キャリア探索との関連—心理学研究, 79, 27-34.
- Deci, E.L. & Ryan, R.M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum.
- Gati, I., Krausz, M. & Osipow, S.H. (1996). A Taxonomy of difficulties in career decision making. *Journal of Counseling Psychology*, 43, 510-526.
- Gordon, V. N. (1998). Career decidedness types: A literature review. *Career Development Quarterly*, 46, 386-403.
- 後藤宗理（2008）. 思春期・青年期を中心とした研究の動向 教育心理学年報, 47, 61-70.
- 萩原俊彦・櫻井茂男（2008）. “やりたいこと探し”の動機における自己決定性の検討—進路不決断に及ぼす影響の観点から—教育心理学研究, 56, 1-13.
- 本多陽子（2004）. 大学生における進路決定に関する信念の特徴 日本青年心理学会第12回大会発表論文集, 68-69.
- Jones, L.K. (1989). Measuring a three-dimensional construct of career indecision among college students: A revision of the Vocational Decision scale-The Career Decision Profile. *Journal of Counseling Psychology*, 36, 477-486.
- 三宅義和（2005）. 職業未決定の構造 居神 浩・三宅義和・遠藤竜馬・松本恵美・中山一郎・畑秀和（著）大卒フリーター問題を考える ミネルヴァ書房, pp.123-153.
- 溝上慎一（2004）. 現代大学生論 ユニバーシティ・ブルーの風に揺れる 日本放送出版協会
- 日本労働研究機構（2000）. フリーターの意識と実態—97人のヒアリング結果より— JIL 調査報告書 No. 136.
- 大久保幸夫（2002）. 新卒無業。なぜ、彼らは就職しないのか 東洋経済
- Ryan, R.M. & Deci, E.L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, 55, 68-78.
- 下村英雄（2003）. 調査研究から見たフリーター—フリーターの働き方と職業意識—現代のエスプリ, 427, 32-44.
- 白井利明（2008）. 学校から社会への移行 教育心理学年報, 47, 159-169.
- 田澤 実（2005）. キャリア教育の導入と今後の進路選択研究の展望—大学生を対象にした実証的研究のレビューに基づいて—中央大学大学院論究 文学研究科篇, 37, 189-201.
- 田澤 実（2006）. 大学生における進路未決定とキャリア形成支援の課題—職業生活への移行困難な若者との対比から—中央大学大学院研究年報（文学研究科篇）, 35, 141-152.
- Vansteenkiste, M., Lens, W., De Witte, S., De Witte, H. & Deci, E.L. (2004). The 'why' and 'why not' of job search behaviour: Their relation to searching, unemployment experience, and well-being. *European Journal of Social Psychology*, 34, 345-363.
- 若松養亮（2001）. 大学生の進路未決定者が抱える困難さについて—教員養成学部 of 学生を対象に—教育心理学研究, 49, 209-218.
- 若松養亮（2002）. 大学生の進路未決定者が抱える困難さの分析—決定者における「決定できた経緯」からの考察—日本教育心理学会第44回総会発表論文集, 416.
- 若松養亮（2004）. 教員養成学部生における進路意思決定の遅延—3回生11月時点で未決定の学生を対象に—滋賀大学教育学部紀要 教育科学, 54, 77-86.
- 若松養亮（2005）. 教員養成学部の進路未決定者が有する困難さの特質—類型化と教職志望による差異の分析を通して—青年心理学研究, 17, 43-56.
- 若松養亮（2008）. undecided型の進路未決定者に対する意思決定支援プログラムの開発と評価 研究成果報告書（滋賀大学教育学部）, 1-26.
- 若松養亮・下村英雄・山田剛史・佐藤有耕・上瀬由美子（2005）. 就職と自己—「自己分析」という迷宮—（自主シンポジウム）日本教育心理学会第47回総会発表論文集, S44-S45.

（受稿3月23日：受理5月7日）